

講演 1

新石器時代からローマ鉄器時代までの英国における社会・祭祀・宗教

マイク・パーカー・ピアソン ロンドン大学（UCL）考古学研究所教授

要約：英国後期先史時代の4000年間において、祭祀と宗教の主な潮流は、新石器時代および青銅器時代初期の牧畜農耕民による祖先祭祀（大規模な墓葬構造物と関連）から、青銅器時代および鉄器時代の祭祀（景観、河川景観、家庭内領域で行われた犠牲と豊穡の儀礼）へと移行した。これは、人々が重要な資源として動員される移動的な親族集団間の関係から、人々がより定住化し農業領域内に定着するにつれて、土地の支配と生産性へと移行する長期的な社会的変遷を反映している。こうした変化にもかかわらず、特定の宗教的慣行は終始重要な位置を占め続けた。特に太陽と月の運行を宗教的に観察する慣習は、新石器時代中期から青銅器時代初期にかけてエリート層の祖先祭祀や埋葬儀礼に取り入れられ、青銅器時代後期から鉄器時代の円形住居の住宅構造に普遍的に組み込まれた。これと並行して、紀元前1000年以前から続く月食周期に関する専門的な天文学的知識は、宗教専門家が権威を行使することを可能にした。この権威は、ローマの侵攻期までに、様々な社会階級の中にドルイド（司祭、裁判官、知恵の教師として）を含む、次第に階層化が進む社会において発揮されたのである。

キーワード：祖先、太陽と月の天文学、豊穡、犠牲、ドルイド

紀元前4000年から紀元43年のローマによるブリテン島植民までの期間は、新石器時代、青銅器時代、鉄器時代を包含し、農耕の到来から小規模な原始国家の出現に至る時代である。ブリテン島、アイルランド、北西ヨーロッパにおいては、この時代は文字を持たないため先史時代と見なされる。鉄器時代の最終数世紀に至って初めて、文献による裏付けが得られる。しかし、ギリシャ・ローマの著述家によるこれらのわずかな書面資料は、詳細に乏しく、問題のある宣伝的性質を帯びている。先史時代の社会的・儀礼的・宗教的側面を再構築しようとする考古学者にとって、物質的遺物のみに依存することは大きな課題である。かつて考古学的推論の梯子においてほぼ到達不可能な段階と見なされていたこれらの側面は、実践・信仰・物質性の関連性を探求する新たな証拠と理論的視点により、過去50年間で次第に解釈可能になってきた。

英国最初の農耕民は紀元前4100～4000年頃、大陸ヨーロッパから到来した。彼らは家畜化された牛、羊、山羊、豚、そして小麦、大麦、豆類をもたらした。

到着後2世紀以内に、彼らは大陸に既に存在していた形態の記念建造物を建設し始めた。特に長形墳やドルメンといった葬祭構造物、そして堤防囲い地のような集会場（gathering sites such as causewayed enclosures）などがそれにあたる。これらは、氏族（リネージ）レベルでの一定の複雑な社会組織を必要とただけでなく、新石器時代初期の生活における祭祀的・宗教的側面を具体化するものであった。墓碑内の集団的かつ二次的な埋葬儀礼は、祖先信仰と慣行への重点を示している。ある事例では、バラバラになった骨の考古学的・遺伝学的分析により、単一の男性祖先とその4人の女性パートナーから派生した5世代の血統が墓に埋葬されていたことが明らかになった。一方、長形墳やその他の墳墓が氏族の祖先の領地との関係を体現していたのに対し、堤防囲い地は異なる領地から集まった人々の集いを収容し、饗宴、紛争解決、同盟形成、その他の社会的結束の祭祀が行われた。



図1 ペントレ・イファンの新石器時代初期（紀元前 3800～3600 年）の支石墓



図2 ウェスト・ケネットの早期新石器時代長形墳（紀元前 3700～3600 年）

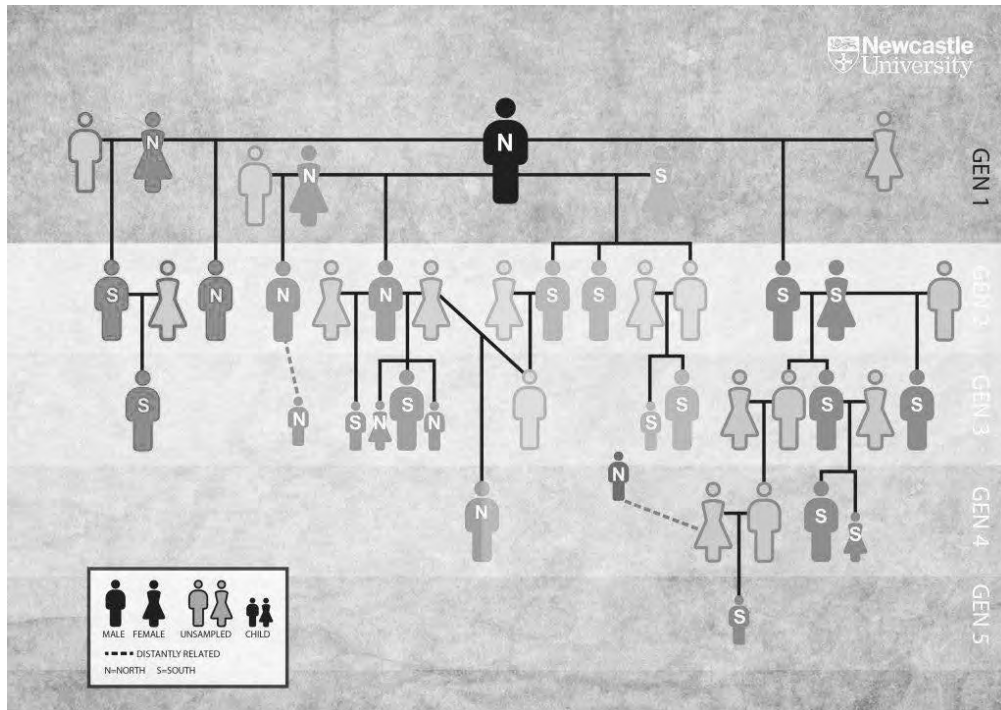


図3 ヘイズルトンの新石器時代初期の墳墓に共同埋葬された、一族の始祖とその五代の子孫たち

紀元前 3400 年までに、こうした祖先崇拜の祭祀は集団から個人へと移行した。多くの死者は単独で埋葬されるようになり、土葬や火葬が行われ、中には数百人の労力を要する巨大な墳丘内に葬られる者もいた。アイルランドおよびブリテン島の西端・北端地域では、巨大な通路を持つ墓が祖先崇拜に新たな次元を加えた。その構造には太陽の象徴性が組み

込まれており、冬至または夏至の日の出・日没の光が、長い石造通路の先にある埋葬室内の遺骸を照らすよう設計されていた。こうして太陽が「あらゆる生命の永遠の供給源」として持つ宗教的意義は、これらの記念碑的墓に埋葬された祖先たちと直接結びつけられたのである。



図4 真夏の太陽が昇り、ブリン・セリ・ドウの新石器時代中期の通路墓の内部を照らす

この中期の石器時代（紀元前 3400～3000 年）には、ストーンサークルやヘンジ（円形の堀で囲まれた構造物）を含む円形の記念建造物が建設された。幾何学的に正確な円形記念建造物が太陽の軌跡と一致する事例が散見されることから、太陽崇拝の宗教的祭祀が発展しつつあったことがさらに示唆される。この傾向は新石器時代後期（紀元前 3000～2500 年）にさらに顕著となり、土・石・木材を用いた円形建造物が急増。その多くは太陽だけでなく月の出と月の入りも参照していた。

これらの中で最も注目すべきはストーンヘンジであり、紀元前 3000 年から 2900 年にかけてヘンジとして建造され、ソールズベリー平原に広がる大規模な火葬墓地と、より広大な儀礼複合施設の一部を囲んでいた。この遺跡は自然地形の一端に築かれ、偶然にも冬至の日の入りと夏至の日の出を結ぶ軸線上に位置していた。これにより、複合施設には独特の「場所の精霊(Spirit of Place)」が宿ったようだ。イギリスとアイルランド全域には他にも多くの祭祀用施設が築かれ、同様に、特徴的な地形を持つ場所では、聖なる場所の精霊が宿る施設が建設された。



図5 ストーンヘンジは新石器時代後期に、至点と一致する自然地形の一端に建設された



図6 ストーンヘンジのブルーストーンは、ウェールズのプレセリにある記念建造物群内の石の円環として最初に建てられた可能性がある

他のストーンサークルとは異なり、ストーンヘンジは地元ではなく遠方から運ばれた立石で構成されていた。これには西に225km離れたウェールズの記念建造物群から運ばれた80個のブルーストーンや、北に750km以上離れたスコットランドから運ばれた祭壇石が含まれる。このことから、ストーンヘンジは祖先の精霊を石に宿し、太陽と月の永遠の運行との結びつきを体現しただけでなく、ブリテン島全体の人々の神聖な一体性も象徴していた可能性が高まる。

ストーンヘンジや新石器時代後期のその他の記念建造物は、共有された中央集権的な政治・宗教的枠組みのもとで働く数千人の労働力を必要とした。

これらは、ヨーロッパからステップ起源の祖先を持つ人々、いわゆるビーカー人（紀元前2450年～1800年）が到着すると、それはすぐに終焉を迎えた。彼らの太陽を基盤とした宗教は、日の出を重視した記念建築から明らかであり、英国に既に存在したヘンジや石・木材の円環といった記念建造物の慣行とよく調和した。例えばストーンヘンジの外周円環には、冬至の日の出方向へ向けた新たな入口が設けられた。巨大なシルベリー・ヒルの墳丘（紀元前2460～2270年）の建造後、記念建造物は小規模なプロジェクト——墳丘、ヘンジ、円環構造——に限定され、動員される労働力は氏族単位の数十人あるいは数百人に留まった。

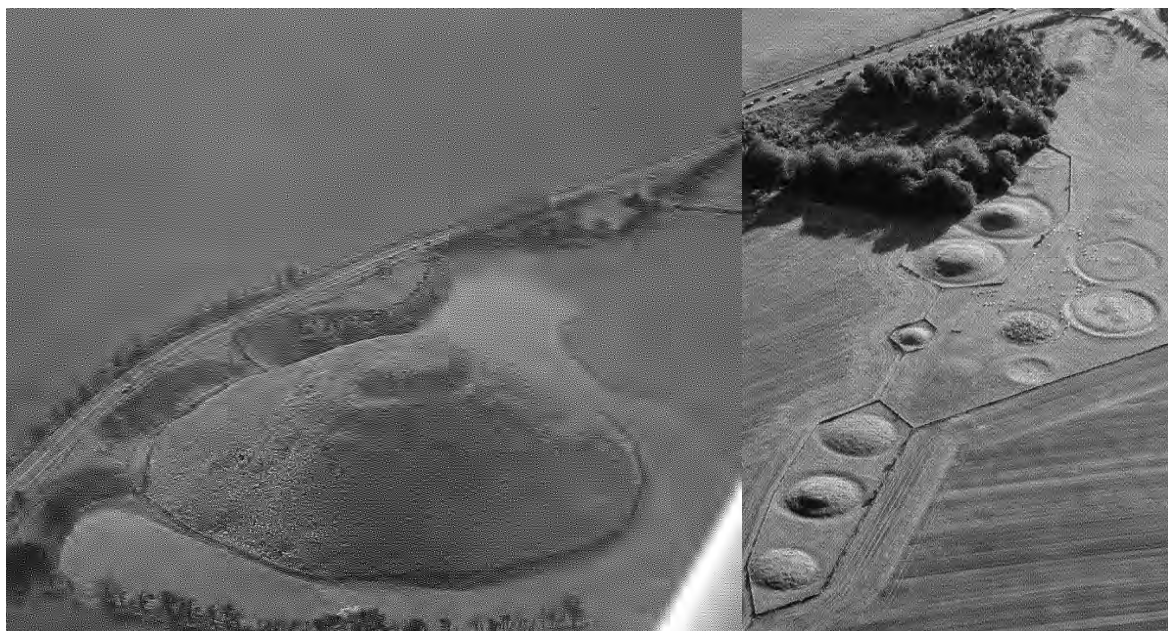


図7 シルベリー・ヒル（左）；ウィンターボーン・ストーク交差点付近（ストーンヘンジ近く）の青銅器時代初期（紀元前 2400～1800 年）の古墳群（右）

この社会的に分散した社会において、特定の氏族は新たな形態の持ち運び可能な富——金や銅、そして牛——を大量に蓄積し、古墳築造の前後の葬送儀礼において顕示的消費を行った。こうした祖先的エ

リート層の副葬品として金やその他の貴重品が制限された事実は、この移動型牧畜社会における階級分化を明らかにしている。



図8 ストーンヘンジ近郊のブッシュ・パローにおける青銅器時代前期（紀元前 2000～1800 年）の埋葬から出土した金およびその他の貴重な副葬品

紀元前 1600 年（中期の青銅器時代の始まり）までに、牧畜が家畜と作物のより均衡の取れた混合農業へと進化するにつれ、古墳の景観は畑の景観へと変容しつつあった。円形の記念建造物——実際、あらゆる記念建造物——は、家屋と畑からなる一見非宗教的な世界において使用されなくなった。しかし祭祀的・宗教的生活の円形建築様式は、これらの円形

住居に具現化されていた。その日の出を向いた出入り口は、前世紀からの太陽信仰を継承していた。後期青銅器時代（紀元前 1200～800 年）には、円形住居内での生活に関わる配置は太陽の日常的な運行を模倣するようになり、日中の活動は南側で、寝台は北側に配置された。

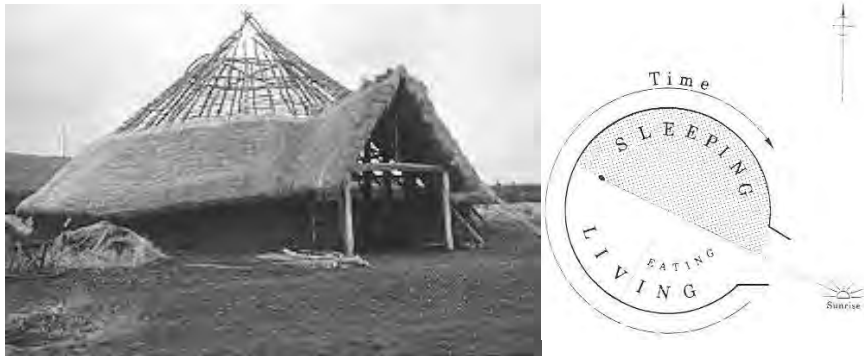


図 9 復元された鉄器時代の円形住居と、その内部における太陽の運行順序に基づく空間配置の模式図

犠牲と供物の祭祀は新石器時代初期から宗教生活の一部であったが、これらは青銅器時代中期以降に広く普及し、河川や湿地帯、陸地に埋設された青銅製の武器や道具に最も顕著に表れている。一部の事例では、河畔の供物は木製の杭で築かれた栈橋の脇に安置されていた。年輪年代測定によれば、それらの木材の伐採時期は皆既月食と一致しており、現時

点で最古のものは紀元前 1076/1075 年の冬にさかのぼる。フィスカートンでは紀元前 457 年から 338 年にかけて、10 回の月食と一致する時期に木材が伐採されていた。この高度な天文学的知識は、宗教的専門家の存在を示唆しており、紀元前 1 世紀にユリウス・カエサルが記述したドルイド教徒の可能性が考えられる。



図10 フィスカートンにある川へと続く鉄器時代の木造栈橋

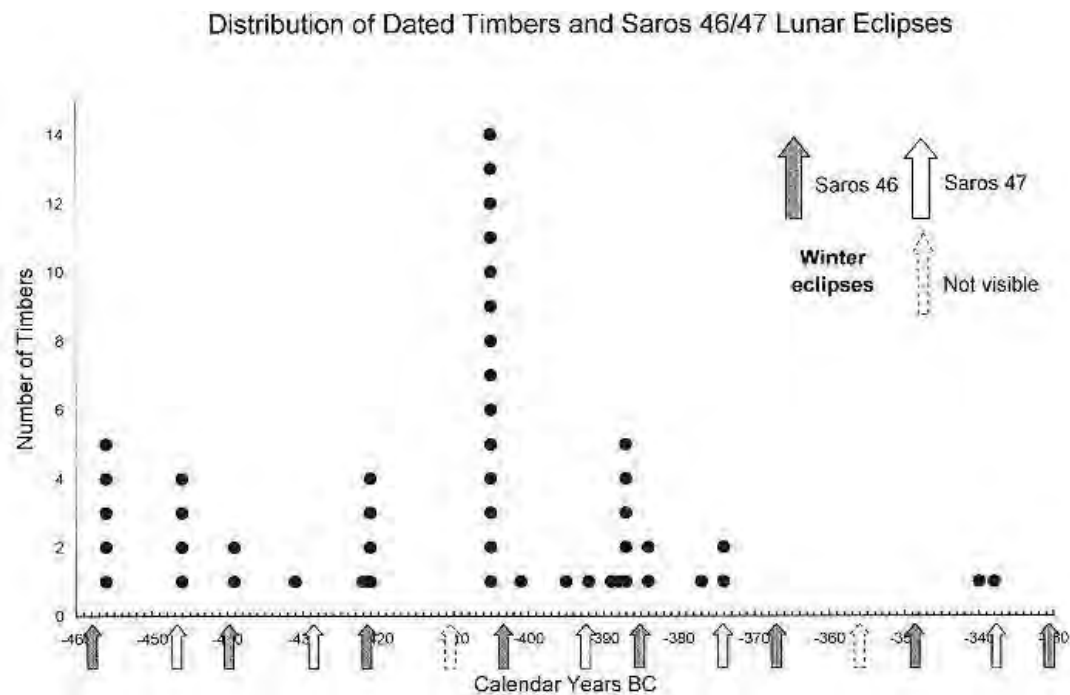


図 11 フィスカースンにおける伐採時期と皆既月食の相関関係

鉄器時代（紀元前 800 年～紀元 43 年）を通じて円形住居は建築され続けたが、神殿のような建造物の痕跡は後期鉄器時代（紀元前 100 年～紀元 43 年）まで確認されない。この時期にローマ様式や大陸の影響を受けた神殿と聖域が南ブリテンに現れたのである。

この時点に至るまでの鉄器時代を通じて、宗教生活の祭祀は家庭内に限定されていた。住居内での活動として、また集落周辺の穴における犠牲や供物として行われたのである。犠牲に捧げられた品物や動物が農業的性質を持つことから、豊穰との関連性が明らかだが、人間も含まれていた可能性がある。

Lecture 1

Society, ritual and religion in Britain from the Neolithic to the Roman Iron Age

Mike Parker Pearson Professor, UCL Institute of Archaeology

Abstract: During 4000 years of British later prehistory, the main trend in ritual and religion was from ancestor rituals of the Neolithic and Early Bronze Age pastoralist farmers, associated with large mortuary structures, to Bronze Age and Iron Age rituals of sacrifice and fertility enacted within the landscape, riverscape and domestic spheres. This reflects a long-term social transition from relationships among mobile kin groups in which people were mobilised as the critical resource, to the control and productivity of land as people became more sedentary and fixed within their agricultural domains. Despite these changes, certain religious practices remained significant throughout, notably the religious observances of the movements of the sun and the moon, appropriated during the Middle Neolithic and Early Bronze Age in elite ancestor and mortuary rituals and encoded more universally within the domestic architecture of Late Bronze Age and Iron Age roundhouses. Alongside this, specialised astronomical knowledge of lunar eclipse cycles from before 1000 BC onwards allowed religious specialists to exert authority within an increasingly hierarchical society which, by the time of Rome's invasions, included druids – as priests, judges and teachers of wisdom – among its different social classes.

Keywords: Ancestors, solar and lunar astronomy, fertility, sacrifice, druids

The period between 4000 BC and the Roman colonisation of Britain in AD 43 covers the Neolithic, Bronze Age and Iron Age, from the arrival of farming to the emergence of small proto-states. Within Britain, Ireland and northwest Europe this was a period without writing and thus is considered as prehistory. Only from the final centuries of the Iron Age is there any text-aided evidence and, even then, these few written sources, provided by Greek and Roman authors, are sparse on detail and problematically propagandist. For archaeologists interested in reconstructing the social, ritual and religious dimensions of prehistoric life, this reliance on material remains alone presents considerable challenges. Previously considered as forming an almost unreachable rung on the ladder of archaeological inference, such aspects have gradually been opened up to

interpretation in the last fifty years thanks to new evidence and theoretical perspectives which have explored links between practice, belief and materiality.

The first farmers of Britain arrived from continental Europe *c.* 4100 - 4000 BC, bringing domesticated species of cattle, sheep, goats and pigs, and wheat, barley and legumes. Within two centuries after arrival, they began to construct monuments in forms already in existence on the Continent, notably funerary structures such as long barrows and dolmens, and gathering sites such as causewayed enclosures. These required a certain complexity of social organisation at lineage level as well as materialising the ritual and religious dimensions of Early Neolithic life. The collective and secondary burial rites within the

funerary monuments exhibit a focus on ancestor beliefs and practices. In one case, archaeological and genetic analyses of disarticulated bones have revealed a lineage of five generations buried in the tomb and descended from a single male ancestor and his four female partners. Whereas long

barrows and other tombs appear to have embodied lineages' relationships to ancestral territories, causewayed enclosures hosted gatherings of people drawn from different territories for feasting, conflict resolution, alliance formation and other rituals of social cohesion.



Fig.1 The Early Neolithic dolmen (3800–3600 BC) of Pentre Ifan



Fig.2 The Early Neolithic long barrow (3700–3600 BC) at West Kennet

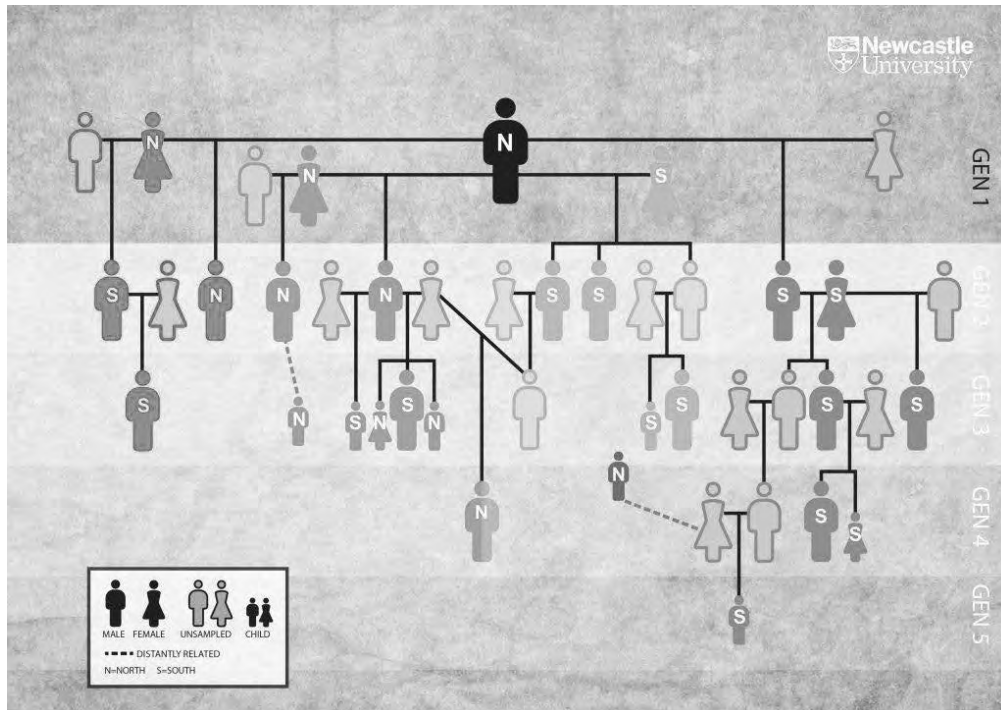


Fig.3 The founding ancestor and five generations of a lineage buried collectively in the Early Neolithic tomb at Hazleton

By 3400 BC, these ancestor rituals shifted from the collective to the individual. Many of the dead were now buried singly, as inhumations or cremations, some of them within large burial mounds which required hundreds of people to construct them. In Ireland and the western and northern fringes of Britain, large passage tombs added another dimension to these ancestor

practices by incorporating solar symbolism into their construction, with the solstice sunrise or sunset illuminating the remains of the dead within their burial chamber at the end of a long stone-built passage. In this way, the religious significance of the sun as the eternal provider of all life was directly linked to those ancestors buried within these monumental tombs.



Fig.4 The midsummer solstice rising sun shines into the chamber of the Middle Neolithic passage tomb of Bryn Celli Ddu

During this Middle Neolithic period (3400–3000 BC) circular forms of monumental architecture were constructed including stone circles and henges (circular ditched enclosures). The occasional associations of these geometrically precise circular monuments with solar alignments give further indications of a developing solar religious cult. This became more developed during the Late Neolithic (3000–2500 BC) with a proliferation of circular monuments in earth, stone and timber, many of them referencing the rising and setting of the moon as well as the sun.

The most remarkable of these was Stonehenge which was constructed as a henge in 3000–2900 BC enclosing a large cremation cemetery and part of a larger ceremonial complex on Salisbury Plain. It was built on the end of a natural geomorphological landform coincidentally aligned on the solstice axis of midwinter sunset–midsummer sunrise, and this appears to have given the complex a distinctive ‘spirit of place’. Many other ceremonial complexes were built throughout Britain and Ireland, others similarly in places with distinctive topographic features given a sanctified spirit of place.



Fig.5 Stonehenge was built in the Late Neolithic at one end of a solstice-aligned natural formation

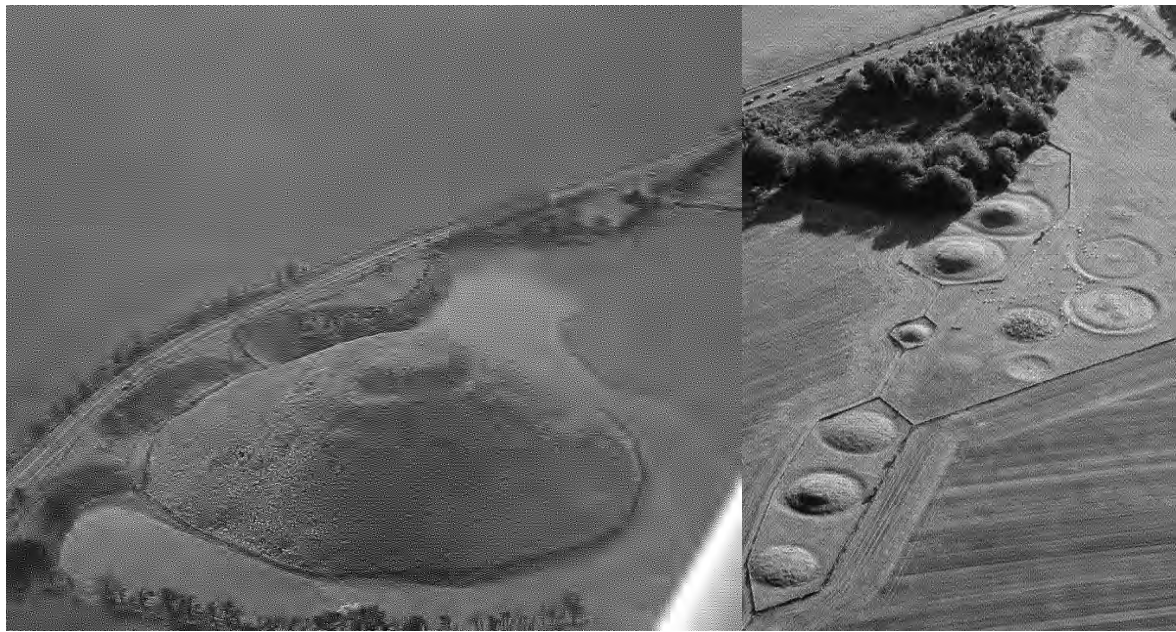


Fig.6 Stonehenge's bluestones may have been first erected as a stone circle within a monument complex in Preseli, Wales

Unlike other stone circles, Stonehenge was composed of standing stones brought not from the locality but from a distance, including 80 bluestones brought from a monument complex in Wales 225km to the west and its Altar Stone from Scotland over 750km to the north. This raises the likelihood that Stonehenge embodied not only ancestral spirits in stone and their link with the eternal movements of the sun and the moon but also the sacred unity of the people of the entire island of Britain.

Stonehenge and other monuments of the Late Neolithic required the labour of thousands of people working within a shared and centralised

political and religious framework. That ended soon after the arrival from Europe of people with steppe-derived ancestry, known as the Beaker people (2450–1800 BC). Their solar-based religion, evident from monumental architecture focused on the sunrise, adapted well with existing monument-building practices in Britain of henges and circles of stone and timber. For example, Stonehenge's outer circle was given a new entrance towards midwinter sunrise. After the construction of the huge mound of Silbury Hill (2460–2270 BC), monument-building was limited to small projects – tumuli, henges and circles – requiring labour mobilisation at the lineage level of tens or hundreds of people only.



*Fig.7 Silbury Hill (left); Early Bronze Age tumuli (2400 – 1800 BC)
at Winterbourne Stoke crossroads, near Stonehenge (right)*

Within this socially decentralised society, certain lineages amassed large quantities of the new forms of portable wealth – gold and copper as well as cattle – to conspicuously display and consume in funerary rituals before and during tumulus-

building. The restriction of gold and other precious substances as grave goods for these ancestral elites reveals the class divisions within this mobile pastoralist society.



*Fig.8 Gold and other precious grave goods from an Early Bronze Age burial
(2000–1800 BC) at Bush Barrow, near Stonehenge*

By 1600 BC (the start of the Middle Bronze Age), landscapes of tumuli were becoming transformed into landscapes of fields as pastoralism evolved into

more balanced mixed farming of animals and crops. Circular monuments – in fact, all monuments – went out of use in a seemingly non-religious world

of houses and fields. Yet the circular architectural form of ritual and religious life was embodied in these roundhouses, their sunrise-facing doorways continuing the solar-based beliefs of previous centuries. By the Late Bronze Age (1200–800 BC)

the internal structuring of domestic activities in the roundhouse mimicked the daily movement of the sun, with daytime activities in the south and sleeping platforms in the north.

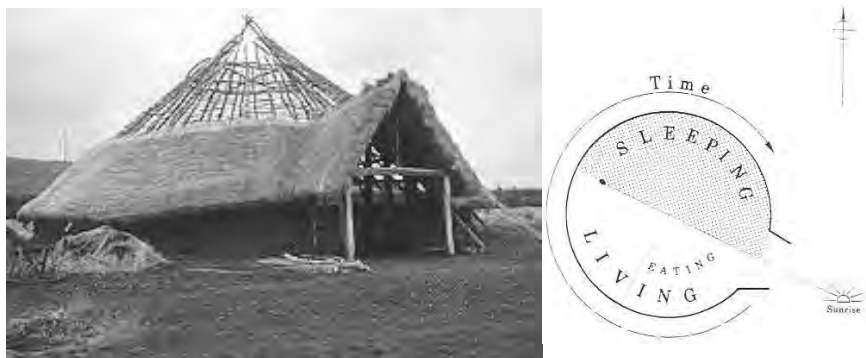


Fig.9 A reconstructed Iron Age roundhouse and a schematic representation of the sunwise ordering of space within

Rituals of sacrifice and offerings had been a part of religious life since the Early Neolithic but these became widespread from the Middle and Late Bronze Age onwards, most evident in the bronze weapons and tools deposited in rivers and wet places as well as on land. In some cases, riverside offerings were deposited beside wooden post-built piers. Dendrochronological dating shows that felling

dates of their timbers coincided with total lunar eclipses, the earliest so far known dating to the winter of 1076/1075 BC. At Fiskerton timbers were felled coincident with ten lunar eclipses between 457 and 338 BC. This degree of astronomical sophistication suggests the existence of religious specialists, perhaps the druids described by Julius Caesar in the 1st century BC.



Fig.10 An Iron Age timber pier leading to a river at Fiskerton

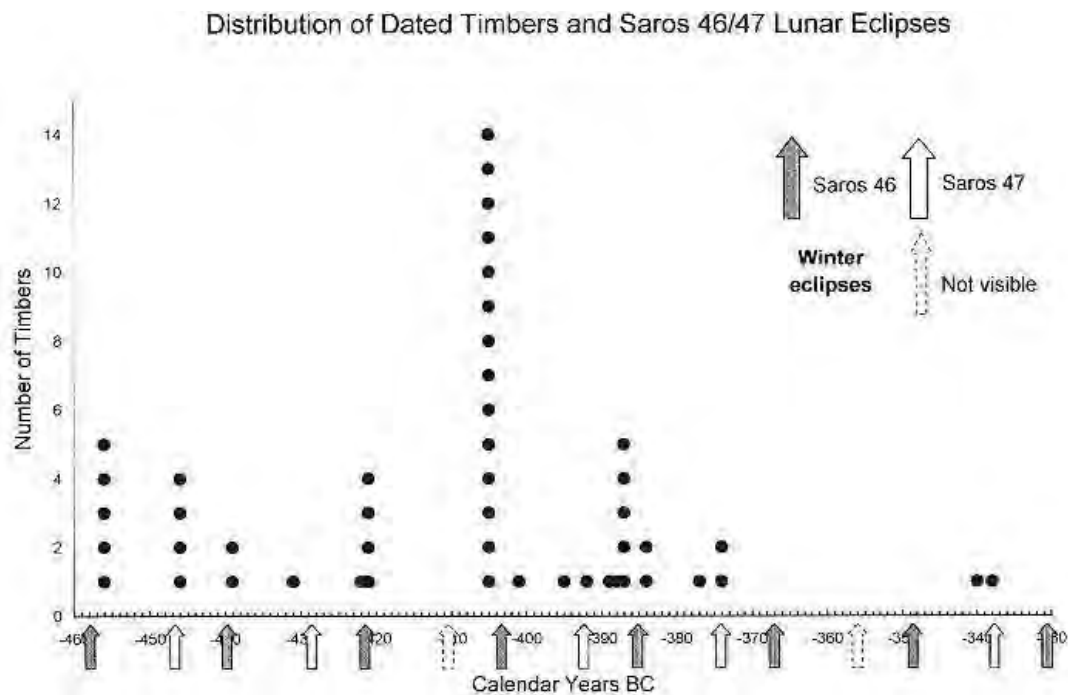


Fig.11 The correlation of timber-felling dates at Fiskerton with total lunar eclipses

Roundhouses continued to be built throughout the Iron Age (800 BC–AD 43) with no evidence for any temple-like buildings until the Late Iron Age (100 BC–AD 43) when Roman and continental-inspired temples and sacred precincts appeared in southern Britain.

Throughout the Iron Age until this moment, the

rituals of religious life were confined to the domestic realm, as activities within the dwelling and also as sacrifices and offerings in pits around the settlement. Their association with fertility is evident from the agricultural nature of the sacrificed items and animals but humans too might be included.